

## [特別活動]

# 関わり合いながら学級の課題を解決していく中で 自己有用感を高める集団作り

荒木 俊邦\*

### 1 問題の所在

中学校学習指導要領において、学級活動の目標は「学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。」とある。本県では「他者への理解を深め、合意形成が図ることができるよう、学級活動や児童会・生徒会活動での話し合い活動を大切にするなど児童生徒会活動を推進する」ことを重点事項として挙げられている。いずれも生徒が主体となって「話し合い → 合意形成 → 役割分担し協力 → 学校生活をよりよいものとする」過程とその過程の中で必要とされる力を身に付けさせることの必要性がうかがえる。

しかし、筆者は過程よりも即効性と結果ばかりを優先してしまい、教師主導によって学級の諸問題の解決を図ってきた。そのため、課題や問題を自分事として捉えられない生徒が多く、課題解決に向けて努力している生徒に対しても、教師がそれを取り上げ褒めたり、仲間同士で賞賛し合ったりする場面が少なかったことによる自己有用感の低さなどが課題としてあった。その結果、学級活動は停滞し、生徒一人ひとりがより良い学級・学校生活の実現ができた実感させることができなかつた。

### 2 研究の目的

栃木総合教育センターの研究結果(H25)では中学生の「自己有用感」を高めるための重要な要素として「存在感(他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感)」、「承認(他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況)」、「貢献(他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしている状況)」の3つを挙げ、他者や集団に「貢献」し、「承認」されることで、他者や集団における「存在感」が高まり、同時に「自己有用感」が高まるとしている。また、本人が実感している「存在感」が他者や集団に「貢献」したいという意欲につながることもある。そこで、教師主導の学級作りからの脱却を図り、生徒が主体的に課題解決を図り、学校生活をより良いものとしていくために「自治活動のサイクルを確立すること」が必要であると考えた。具体的には、自己有用感を実感させる機会を学級の日常活動の中に意図的に仕組みつつ、学級や学校の課題を自分事として捉え、学級全体での合意形成に繋げていくことに重点を置いた。

### 3 研究の方法

#### (1) 対象者

筆者が平成30年度に担当した学級 3年2組(男子21名 女子12名 計33名)

#### (2) 研究方法

「みんなで話し合い、活動の方針を決定、運営していこう」をキーワードに自治活動を進めた。また、学級や係活動での課題解決では、班会議や班長会、学級会(5分から15分のショートミーティングで現状分析→方針→目標立てを行う)を実施した。全員が意見を言うための時間と手立てを保証し、一部の生徒の意見だけで進められないように配慮した。行事では毎活動後に、パートミーティングを行い、生徒全員で成功に向けて、活動に取り組ませた。生徒の手で課

\*糸魚川市立糸魚川東中学校

題解決をさせていくことで、帰属意識を高め、生徒自身が学級には不可欠の存在であることを感じさせることが目的であった。「承認」に関しては、体育祭、合唱祭等の行事や日常生活でリーダーだけでなく、全員が互いに頑張り認め合い、貢献していると感じられるような振り返り活動を仕組んだ。成果はアンケートや振り返りシート、観察法で見取った。

#### 4 研究の準備

##### (1) 自治の素地作り

話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して学校生活をよりよくしていくためには、望ましい人間関係、コミュニケーション能力の育成、学級における支持的風土の醸成が必須だと考え、話の聴き方トレーニングや合意形成のはかり方などのピアサポートトレーニングを4月より定期的に行った。活動後は振り返りを行い、掲示した。

##### (2) ゴールの提示・関わり合いながら課題解決していくことの意義を学級全体で理解する

4月の学級活動で、「良い人間関係を作りながら、みんなで協力して、課題解決をしていける集団」を目指すことが学級の目標であることを示した。具体的な目標として、「普段の学級生活を話し合いでより良くしていき、そこで培った力で合唱祭を成功させること」を挙げた。そのためには、学級に一人ひとりの居場所があること、自分に与えられた役割を果たすこと、仲間の頑張りに感謝し、それを認めること、集団に貢献していると感じながら活動に取り組むことが大切であることを伝えた。



図1 目指す学級像と自治へのステップについてのプレゼンテーション

#### 5 実践と考察

4月から5月までの2か月間は教師主導または教師がリーダーを支えながら、班長会・班会議をはじめとする話し合い活動を運営し、自治活動のよいモデルをリーダーに提示した。6月以降は生徒主導で班会議・班長会を運営した。班会議・班長会での経験を生かしながら、体育祭、合唱祭などの大きな行事で生徒による自治で取り組めるように仕組んだ。活動後には評価・振り返りを行い、成果と課題を明らかにした。

##### (1) 自治活動

###### ① 班会議・班長会

本校では毎週木曜日は学級優先日として班長会を行う時間（20分間）が確保されている。「班会議で学級・自班の課題について考える→班長会で方策を考え、課題解決に向け目標を設定する→班長会通信（学級委員、班長が輪番で担当）を発行し、級友に周知し、課題に全員で取り組む→翌週の班会議で成果の確認を行う」のサイクルを意識

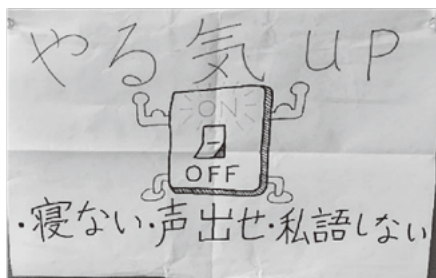


図2 週の学級目標啓発ポスター



図3 班長が作成した通信

し、活動させた。目標を達成することができたら、互いにハイタッチをし、認め合う活動を行った。目標を達成することができなかつた時には、目標は継続とし、改善点を班内で考えさせた。当初は話合いで教師の助言や提言に頼ってしまい、主体的に考える生徒は少なかったが、班会議やクラス会議を重ねるごとに、自分たちで有効な解決策を考えることができるようになっていった。自分たちで考えた解決策で、学級のそうした姿勢が諸問題を解決することにつながり、生徒一人ひとりの自信にもつながった。

## ② 合唱練習でのパートミーティング

合唱練習に振り返り活動を位置づけ、パートごとにミーティングを行った。それまでに培ってきた「話し合い → 合意形成 → 役割分担し協力 → 課題解決」の過程を踏襲するため、「合唱練習が終わったら、パートごとに集まり、付箋に「練習での目標達成に向けて自分が頑張ったこと、目標の達成度、自分から見た仲間の頑張り」を書く」→ 「目標シートに付箋を貼りながら一人ずつ発表をする」→ 「目標を達成できたか話し合い、次回の目標を設定し、目標シートに書く」→ 「全体会でパートごとに翌日の目標を発表・共有し、全体の進捗状況を確認する」の流れで行った。目標シートは合唱の進捗状況と学級への貢献を可視化するために教室に掲示した。一人ひとりが自分の考えをもってミーティングに参加できるように付箋を活用した。パートミーティングの司会進行表を用意していたが、班会議と流れが似ていたため、パートリーダーたちは進行表を用いずにミーティングを行っていた。話し合いをもとに目標を設定し、パート内、学級内で共通理解が図られていたため、全生徒が目標達成に向けて協力していた。また、思うように歌えないときは、互いに励まし合いながら、練習に取り組んでいた。こうした積み重ねにより、合唱祭当日は金賞を獲得することができた。以下は合唱祭後の振り返りの抜粋である。

練習でも何度も何度も意見を交換し、繰り返し、繰り返し表現を追求していました。ただ音程を追うだけでなく、表現の段階に達していたと思います。全員でそろえたブレス、感情の込め方、歌っているときの表情。Amazingという言葉がぴったりです。すごいです。3年2組はこんな素晴らしい合唱ができる学級なんだと思いました。（男子）

最初はパートミーティングを行うよりも、時間ギリギリまで練習したいと思っていました。でも、みんなで話し合い、目標を決めて取り組んできたから、クラス全員が一丸となって練習に取り組み、金賞がとれたと思います。今年の合唱練習は男女で揉めることなく終わることができてよかったです。これからもみんなと協力して残りの学校生活を送ってみたいです。（女子）

また、振り返り用紙には、「クラスのスローガンと目標達成率」の項目があったが30名の生徒が個人もクラスも100%と記述していた。「有効だった練習方法」にパートミーティングを挙げている生徒が16名いた。この合唱祭に向けた取り組みで、自分たちの手で大きな目標を達成することができ、所属する学級や自分自身への有用感を高めたと考えられる。行事前と比べて、班長会ではリーダーがより良い学校生活にするために意見を出し合うようになり、話し合いが活発になった。自分たちで学級をよくしていこうという気持ちがより感じられるようになった。



図4 パートミーティングの様子

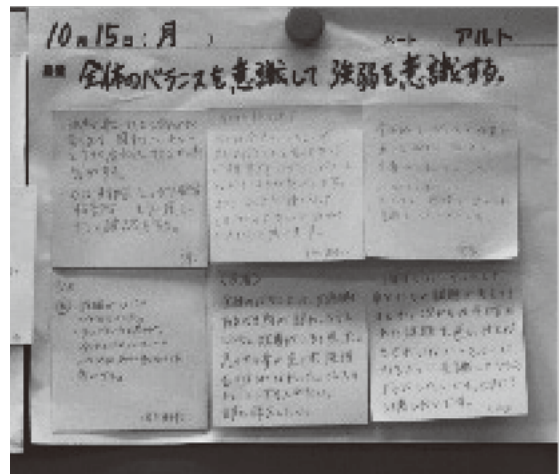


図5 各パートの目標シート

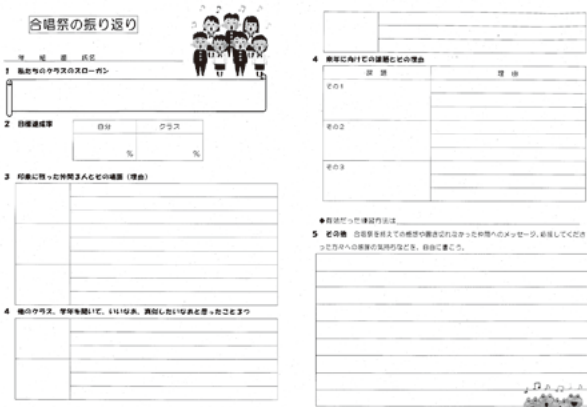


図6 合唱祭後に使った振り返り用紙



図7 教室に掲示された目標シート

(2) 自己有用感を高める活動

① 認め合う場の設定

学校行事や日常生活の中で他の生徒の頑張りに目を向けさせ、賞賛する（される）場面の設定を意図的に行った。学校行事の後、各学期末に独自で決めた賞を互いに贈らせた。1学期は2回（校外学習後、学期末）、2学期は3回（体育祭後、合唱祭後、学期末）の計5回行った。賞状のタイトル、文面は自分で設定できるものとした。もらえる賞状の数に差が出ないように、自班の班員に必ず書くこと、もらった相手が嬉しくなるような肯定的なもので、かつ具体的に誉めているものであることをルールとした。前年は口頭で、互いを認め合う活動を行っていたが、相手にうまく伝えることができずに困っている生徒がおり、賞賛する活動がうまくいっていなかったため、賞状にする形をとった。口頭で気持ちを伝えることを苦手としていた生徒は、賞状に書く時もなかなか書けずにいたが、自分が受け取った賞状を見本として書いていた。班員に手渡し、気持ちを伝えることができ、「大変だったけど伝えられてよかった」と活動後に話していた。また、賞状を台紙に貼り、読み返せるようにしたことで、自分の良さに気づき、自己有用感を高められるように配慮した。「優しい声かけ賞」、「縁の下の力持ち賞」や「男女関係ない賞」など贈られた生徒の頑張りの良さを的確にとらえているものが多く、その日の生活記録帳には「仲間から言葉かけが優しいと言われたことが意外だった。」「見られているとは思わなかった。誉めてもらえて嬉しかった。」と新たな自分の良さに気が付くきっかけとなっていた。2学期に学級委員から、終学活で仲間の良さや頑張りを取り上げるプログラムを行いたいと提案があったため実践した。一日一人ずつ取り上げ、その人の良さを生活記録帳に書きとり、名簿の次の人が発表するというものであった。書かれた生徒が嬉しくなるようなことが書いてあっても、生活記録帳の性質上、他者に見せられるものではなかった。そこで付箋をそのプログラムの日に配り、生活記録帳に書きとめたことを転記させた。付箋を一枚の台紙に張り、教室に掲示することで、学級全体でその人の持つ良さを共有することができるよう工夫した。年間を通じて仲間の良さを見つけ、賞賛する場面を設定することができた。

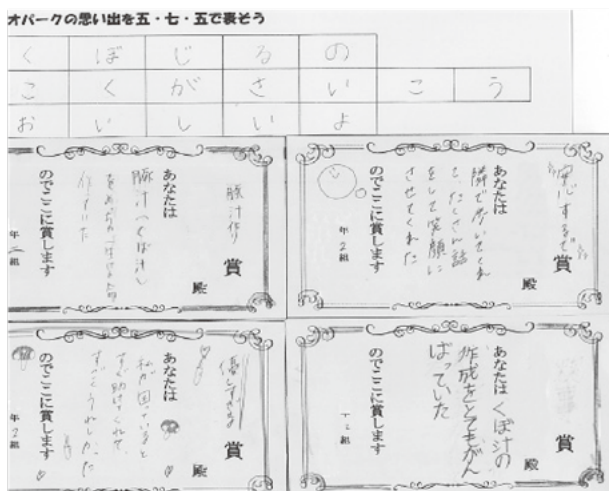


図8 生徒が相互に送り合った賞状

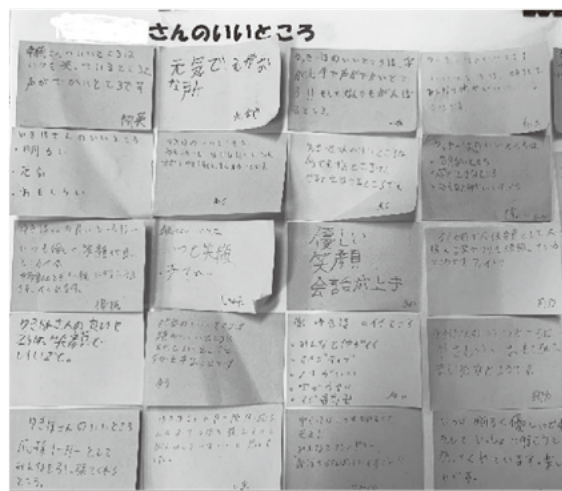


図9 教室に掲示された級友の良いところ

## ② 体育祭練習の振り返り活動

生徒の他者意識を育成するため、集団への貢献感、自分の頑張りをとらえることができるように体育祭練習後に振り返りの時間を設定した。用紙は毎日回収し、点検を行った。振り返りシートは「集団の成長」「他者の頑張り」「自分の頑張り」「次回の目標」の4項目を設定した。生徒間で書いたものを共有する時間を翌日の朝活動に時間に設定した。振り返りが蓄積されることで、自他や集団の成長を感じられるようになった。「他者の頑張り」の項目では、序盤は、前面で活躍するリーダーの名前が挙げられがちだった

が、体育祭中盤からはリーダーを支えるフォロワーや運動が苦手だけど頑張っている生徒、大きな声を出すのが苦手だが応援練習を頑張っている生徒の姿が取り上げられるようになった。目立つ生徒の行為だけでなく、他者の目立たない頑張りに着目しているコメントを、朝学活や学級便り等で全体に周知することで学級生徒の他者意識を育成することができた。また、互いに頑張っていることを知っているからこそ、思うようにできない時に「がんばろう」、「こんな風にやってみたらいいよ」と励まし合ったり、助言をしている姿を多く見かけた。体育祭の活動で躓きそうな生徒も、良好な雰囲気の中で練習を行うことができた。

図10 体育祭の練習後に使用した振り返りシート

## 6 成果と課題

### (1) 成果

以下の表はQUアンケートの結果である。「とてもそう思う、少しそう思う」肯定的評価の増減を矢印で示してある。

表1 対象学級のQUアンケート結果の抜粋

質問項目	5とてもそう思う 4少しそう思う		3どちらとも言えない		2あまりそう思わない 1全くそう思わない		5月との比較
	5月末	合唱祭後	5月末	合唱祭後	5月末	合唱祭後	
クラスの中で存在感があると思う	66.6%	66.6%	27.3%	18.2%	3.0%	15.1%	→
自分の考えがクラスや部全員の意見になることがある	57.4%	63.6%	27.3%	24.2%	15.2%	12.1%	↑
クラスで行う活動には積極的に取り組んでいる	87.9%	93.9%	12.1%	3.0%	0%	3.0%	↑
自分のクラスは仲の良いクラスだと思う	97.0%	97.0%	3.0%	3.0%	0%	0%	→
クラスの行事に参加したり活動するのは楽しい	97.0%	100%	3.0%	0%	0%	0%	↑
自分もクラスの活動に貢献していると思う	97.0%	87.9%	3.0%	9.1%	0%	3%	↓
クラスの中にいるとほっとしたり明るい気分になる	97.0%	93.9%	3.0%	6.1%	0%	0%	↓

合唱祭後に行われたQUアンケートでは、「行事に参加したり、活動したりするのは楽しい」、「自分の考えがクラスや部全員の意見になることがある」、「クラスで行う活動には積極的に取り組んでいる」などの項目で肯定的な意見が多かったが、「クラスの活動に貢献していると思う」の項目では1回目（5月末実施）に比べ、約9%減少し、「クラスの中で存在感があると思う」の項目では、肯定的意見の変化は見られなかったものの、否定的意見が増加した。リーダー層（15名）は表1の質問項目全てにおいて肯定的意見であった。フォロワー層では「自分の考えがクラスや部全員の意見になることがある」、「自分もクラスの活動に貢献していると思う」のいずれでも肯定的意見に推移した生徒が2名いた。自分の考えを伝えるのが苦手な生徒であったが、付箋を活用した合唱祭のパートミーティングや班会議などの意見

交換で、仲間に考えを伝えることができ、それが取り入れられたことによるものと考えられる。対照的に「クラスの中で存在感があると思う」、「自分の考えがクラスや部全員の意見になることがある」、「自分もクラスの活動に貢献していると思う」において否定的意見を示した生徒が4名いた。フォロワー層の生徒は、話し合いで自分の考えが認められ、活動に取り入れられた際に、貢献、承認、存在感を感じるのではないかと考えられる。

振り返りシート上では、リーダー以外の頑張っている生徒の姿を称賛するコメントが多く見られた。各行事後の振り返りでは「行事を終えて、級友との仲は深まった」、「行事を終えて、自分は成長することができた」、「私は行事の成功に向け頑張った」、「自分の学級や級友を誇りに思う」など肯定的意見が多かった。

生徒の変容としては、学級のために解決策を一生懸命に考えるリーダーの姿と、リーダーと共に課題解決を図ろうとするフォロワーの姿が見られるようになった。2学期には生徒が自主的に話し合いをもち、課題解決に向け活動しようとする場面が見られたり、集団のために何をすべきか考え自分から行動する生徒が増えたりした。リーダーを中心にして学級全体が課題解決を目指し、行動をするため、教師側も褒める場面を多く取り上げることができた。生徒の自己有用感も高まり、「よりよい学級を自分たちの手で作り上げていくため、次もまた頑張る」といった良いサイクルも見られるようになった。

## (2) 課題

実践の成果としては、リーダーを中心とする自治活動により、学級活動は活性化し、多くの生徒の自己有用感が高まった。

その一方で今後の課題として、次の3点が挙げられる。

- (1) 当初はフォロワーもリーダーとともに解決策を考え、提案していたが、リーダー任せになりがちな生徒が出てきた。
- (2) リーダーをする人（立候補、推薦を含む）が固定されてきた。
- (3) 貢献、承認、存在感の感じ方に差が生じ、一部のフォロワーの自己有用感が高まらなかった。

今後は、学級生活、行事において、一人ひとりの頑張りが成功を生んでいることを実感させられるようにより明確な一人一役やより細やかで配慮のある役割分担を心掛けたい。話し合い活動では、ファシリテーションスキルを身に着ける活動を取り入れ、意見を出しやすい環境を整えていきたい。リーダーを担う生徒が固定化してしまった点については、各生徒のもつ強みに応じてどの生徒もリーダーとして活躍できる学級の素地づくりを行っていきたい。

## 7 考察

本実践を通して、協働的な自治活動は、生徒が集団に貢献し、承認される機会を仕組みやすく、集団における自身の存在感を高め、同時に自己有用感を高めるのに有効だと感じた。この「貢献する → 承認される → 存在感が高まる → 自己有用感が高まる」のサイクルは、持続可能な学級活動の活性化につながった。しかし、リーダーとフォロワーで、活動の取組への貢献度や積極性が同じであっても、そこから得られる自己有用感には差があった。また、フォロワー間でも、自治活動を進めていく際に自分の意見が認められ、活動に反映されるかどうかで、自己有用感の高まり方に差が見られた。その要因として、リーダーと自身を比べてしまい、集団に対する貢献度の差を感じたり、他者からされた承認を受け入れられなかったりしたことが考えられる。全生徒の自己有用感を高めるためには、関わり合いながら課題解決をしていく中で、フォロワーがリーダーと比較することなく、自分が集団に貢献したことを内省し、他者からの承認を自己有用感に結びつけられるよう活動を工夫していく必要があると考える。

## 8 引用文献・参考文献

- 上越市立浦川原中学校での実践「合唱練習とパートミーティングの取組について」、「体育祭の支援計画」  
 栃木県総合教育センター「高めよう！自己有用感 ～栃木の子どもの現状と指導の在り方～」、2013  
 福井 悟「自己有用感を高める学級活動の工夫－承認とフィードバックによる相互作用を通して－」教育実践研究第30集 2019, pp199-204  
 文部科学省「中学校学習指導要領」、2018, pp162-164